

GEOFIS PROJECT

Vol.7

The Mailgraph of Monthly Publication

2001.07.15

PHOTOGRAPHS WITH TEXT
TATSUANG / ATARASHI TATSUYA

© 2001 Atarashi Tatsuya <http://www.geofis.com/>

GEOFIS

たんばら

玉原<ブナの森>



群馬県沼田市の北側、迦葉山と武尊山に挟まれた、標高・1200mから1300mの地点に広がる玉原高原。そこは関東有数のブナ林が残る、自然界への入り口だ。

7月3日、ハルゼミ時雨れる森を訪ねてみた。既に咲く花も少なく、緑一色の中、ツルアジサイのみが怪しく光っていた(表紙) ブナの古木が倒れ、天井にぽっかりと穴が開く(右) その根元には光が溢れ、やがて新しい命へと繋がって行く。連綿と繰り返されてきた、森の循環。

倒れたブナに身を寄せ、しばし眠りに着く。森との交歓のひとつとき。





森のほとりに小さな
湿原がある。未明、天
より舞い戻った水の精
は朝の光を受け、再び
天へと舞い上がり龍と
なる。



湿原は命の宝庫。
様々な植物に覆われ、
虫たちにとっても棲み
やすい楽土となっている。





ブナの森を流れる一筋の沢。一滴の水がここまでとまるのに、いったいどれ程の年月が必要なのだろうか。森の命を引き継いだ水はやがては海へと注ぐ。

天と、森と、水とが織りなす限りなき瞬間の連続。



森の中は意外と明るい。下草として生えるチシマザサ(ねまがり竹)は密度が荒く、思いの外分け入りやすい。

沢の傍らで見事なトチノキに出会う。(左下)悠然としたその姿は、森の主にふさわしい。根元に腰をおろし、背中を幹に預ける。そうっと目をつむると、微かに風に揺れる葉音。樹のぬくもりが背中を通して体内に伝わってくる。やがて私は樹の一部と化してゆく。森の時間。それは、人と森との呼吸が一つになった時のことだろうか。

遠くでアカゲラのドラミングがこだまする。



ブナの木肌

気の遠くなるような時間を重ね、丸みを帯びた石(花崗岩?)。ある時、梢より落ちたブナの実がその石の上で芽を開いた。僅かに付着した苔類を足がかりに根を張り、やがて石を抱きかかえるほどに成長。どっしりと構えた根は、今後いかなる大風にもびくともしないだろう。何れは森の長となる日が来るかもしれない。逆境を力として。

